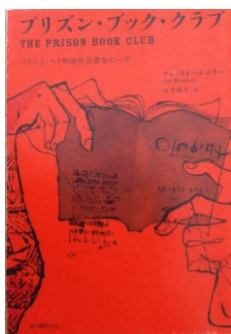


「プリズン・ブック・クラブ（コリンズ・ベイ刑務所読書会の一年）」

アン・ウォームズリー

向井和美 訳

紀伊国屋書店



とても興味深い内容の本でした。カナダのコリンズ・ベイ刑務所内の読書会の記録です。

この読書会は、キャロルという女性が「読書によって彼ら(受刑者)を中流階級へ引き上げたい」「受刑者にもっと幅広い文化を経験してもらうとともに、文化的素養や共感や他者と触れ合うすべを身につけることが贖罪の一環である」という理念のもとに立ち上げた会です。強制的なものではないので、大勢の受刑者のうち参加者はわずか(10~15人くらいだったか)になります。

彼らの辛い生い立ちから服役に至るまでの重く濃い生き様により、彼らの読後の話し合いの内容がとても奥の深いものになっています。会でのやり取りを読んでいると受刑者(しかも重罪)であることを忘れてしまいそうになりますが、現実には殺人や麻薬などの罪で投獄されている人たちです。しかし彼らのとても深い精読さに感動します。各自様々な経験をしているからか、同じ個所の読み込み方においても、その見方は多角的で興味深いのです。

著者自身はかつてロンドンで強盗に襲われ、長い間激しいトラウマに苦しんできた人です。そんな彼女が刑務所内の読書会のボランティアをする決意をし関わっていく中で、受刑者たちの仮釈放後のことまで案ずるようになるほど、この読書会は彼女に影響を与えました。

「天才！成功する人たちの法則」(グラッドウェル・マルコム)という本についての読書会で、『成功する要因は才能なのか、環境なのか』というテーマでメンバーたちの話が盛り上がる場面があります。私はこの部分を読んでいるとき、階級や貧困などについて思いが及んで、「100分de名著」(NHK)で見た「ディスタンクシオン」(ピエール・ブルデュー)や、昨年読んだ「ワイルドサイドをほっつき歩け」(ブレディみかこ)や、「裸足で逃げるー沖縄の夜の街の少女たち」(上間陽子)を思い出していました。また、「またの名をグレイス」(アトウッド・マーガレット)という本についてメンバーたちの討論が活発になったところでは、私がたまたま今年になって読んだ「誓願」と同じ作者でとても面白かったことを思い出しました。いろいろなことを想起させてくれます。このような副産物もあり、この「プリズン・ブック・クラブ」は図書館で借りてきたものですが、貸出期間を一度延長した後結局買うことにしました。また、読書は好きだが苦勞知らずの私と、重い生き方をしてきた受刑者たちとで、同じ本での感想がどう違うか、どう考えているのかを知りたいと思ったからです。「プリズン・ブック・クラブ」で取り上げられた本を私も読んでみて、再度受刑者たちの感想やコメントとともに味わいたいと思っています。

2021.03.12 (Facebook から加筆修正) 佐々木真理